

京都大学人文科学研究所報告

文学理論の研究

桑原武夫編

岩波書店刊行

1967

序 言

桑原武夫

文学作品の生産量において、現代日本は世界に冠絶している。一般人のよむ新聞にも、高級な総合雑誌にも、小説はかならず載っている。そのため、有名文士の収入は、これまた生産量において世界の上位にある映画のスターたちの収入を上まわるほどである。(アメリカその他では逆である。)さまざまの「全集」という名のもとに再生産される文学作品の量も、おそらく世界最高であろう。夏目漱石、島崎藤村といった大文学者はもちろんのこと、多少とも有名な作家は、その死後、かならず全集が出るならわしになっており、それは梶井基次郎、立原道造といった夭折した文学者にまで及んでいる。中江兆民、内藤湖南のような日本の誇るべき一流の思想家、学者の全集がいまだに出版されていないことを思うと、現代日本人の文学への愛好がいかにけしきいかを、あらためて痛感させられるのである。

文学作品の生産・消費のこのような盛大さにもかかわらず、文学についての、文学をふまえての思想的作品の生産量は、おどろくほど少ない。この指摘にたいして、文学作品の生産は多量だというが、その大部分はつまらない、文学とはいえぬものだ、といって、この事実の重みをうち消そうとする人もあるが、そういう人自身が、文学と非文学との区別についてなほどの理論も持ちあわせていないのだから、それは単なる主観的罵倒にすぎないことになる。衰弱したとはいえ、なお文芸時評というものが存在するが、その多くは、月々生産される個々の作品についての感想に終わって、理論的支えをもった批評にはなっていないから、社会のそのときどきの風潮によって左右されやすいものとなる。

人文科学者のなかで、文学研究者の数はきわめて多い。たとえば、ドイツ文学の勉強を職業とする人の数は、ドイツ本国をのぞけば、日本が世界最高である。その他の外国文学の研究者もきわめて多いが、国文学者がそれよりはる

かに多いことは言うまでもない。そしてこれらの人々は、考証学的に、歴史的に、文芸鑑賞的に、熱心に研究に従事しているが、それは個々の作家、作品、ないしは個々の民族文学に密着して、文学全般にわたる理論的考慮がとばしいように見うけられる。そのため、それぞれの分野の研究が他の分野のそれと相互に刺戟しあい、協力しあうことが困難になっている。

私たちはこうした現状の認識から、文学とはどういうものか、について、できるだけ理論的に勉強する必要がある、とかねがね思っていたのである。そのさい、西洋に生まれたすぐれた文学理論にまなぶことは不可欠だが、しかし、西洋の文学研究者の日本・中国などの文学作品にたいする知識ないし読みの深さには、私たちの西洋文学にたいするそれよりも劣るものがあることは、認めてよいであろう。したがって、ただ西洋の理論によりかかるのみでは、東洋の文学をあわせ説明しようするような文学の統一理論を組み立てることはできないのではなからうか。たとえば、メーリングが社会経済的条件によって趣味が異なる例として、未開のブッシュマンと文明の西洋人がベートーヴェンを聞く

序

とき、と書いているところを、私たちは、ヨーロッパの農民と日本の知識人が大雅堂の絵を見ると、と置きかえていままで不十分であったのではないか。西洋ないし中国の文学、思想、科学をまなびてきた人間が、その研究過程で身につけた知識と感覚を生かしながら、日本における文学を検討してみることも、統一理論構築への一歩となりうるにちがいない。

私たちは、おおよそのような基本的な共通意識をもって、この文学理論の研究班を京都大学の人文科学研究所において発足せしめたのである。そして一九六〇年五月十三日に第一回の研究会をもち、初年度は『中江兆民の研究』『ブルジョワ革命の比較研究』と平行して行なわれたため、回数は一〇回にとどまったが、以後、一九六一年は一回、六二年は二一回、六三年は一九回、六四年は二五回、六五年は二五回、六六年は二二回の研究会をもち、その年の八月十九日をもって終了したが、その回数は合計一三九回となっている。

最初は、フロイト、プレハーノフ、ハーバート・リード、トロツキー、サルトル、『古今集序』、『文心雕竜』などの文学論の紹介ないし批判から出発し、やがて感情の構造、想像力の問題、リズム論、フィクション論、反映論、感動の構造、価値論、政治と文学、浄土教論、等々に展開し、その研究過程において、やがて本書に収めた諸論文として結実すべき主題ないし方向がおのずと浮かび上がってきたのである。

いまここに、その成果をとりまとめてみると、各論文はその取りあつかう対象のいかんにかかわらず、つねに可能なかぎり理論的に追求する姿勢を失っていないと信じるが、にもかかわらず、私たちの最初の意図が、十分に実現されているとはとてもいえない。私たちの実力ないし努力の不足もさることながら、文学研究における理論構築がいかにか困難なものであるかを、あらためて痛感させられた次第である。次に各部、各論文の意図と残された課題について簡単にふれておきたい。

第一部は「文学における価値」にあてた。私たちはつねに文学の価値評価をおこなっているが、その基準はまったくあいまいで、常識に従っているにすぎぬといっても過言ではない。桑原・作田・橋本はその論文において、文学の価値を可能なかぎり理論的にとらえてみようを試みた。まず一種の世論調査の方法を用いて、現代日本の標準的な文学愛好者が文学に求める要件を一七項目に整理し、これに説明を加えると同時に、さらに社会心理学的観点からこれを分類整理した。文学の価値にはつねに主観性が介入することを確認しつつも、これを可能なかぎり科学的相対主義の立場から追求しようと試みたものであり、その到達点はなお不十分であるが、今後の研究継続の可能性は含むものと考えている。

加藤論文は、文化人類学の立場からする小説の比較文化論である。小説は個体識別の原理をもつ社会においてのみ発生する様式であり、「近代小説の使命のひとつは、慣習の原理に個人の原理によって挑戦することである」ことを例証しようとする。しかし、個人の原理をあらゆるところにおいて貫徹しようとする近代人も、「家族」の前では足ぶみ

せざるをえない。筆者は家族を超える方法を日本、西ヨーロッパ、中国の小説において比較することによって、文学における価値の問題に間接に光をあてようと試みている。

第二部「文学的発想の原型」において試みられたのは、日本民族という集団の感情構造の文学作品を媒介とする分析である。感情は、一般に無意識の世界にまたがりつつ、私たちの価値意識と行動とを規制する要因となっている。

したがって、それは社会的・人生的現実を深く把握しようとする文学の地下の養分である。言いかえれば、文学研究には、それを生みだした民族の感情構造の分析と把握とが不可欠である。私たちは、日本近代文学を分析例として、文学と感情構造一般との相関という普遍的問題に接近しようとした。

杉本論文と山田論文とは、草花と鳥獣虫魚という私たちの生活に身近な「自然」に着目し、そこに投影された日本人の感情をさぐるうとしたものである。長い農耕の伝統は、私たちのうちに「植物的生」へのなじみを育て、それが

草花模様にもごとく表現を示す。この模様化された民俗的心情は、視覚芸術のみならず、儀礼、祭典などのはたらきを通じて、文学という想像力の分野にも美的形式を与えつづけてきた。日本近代文学は、近代性をうち立てるために、どうしてもこの模様と格闘しなければならなかった。しかも格闘のはてに形を変えた「草花模様」の再出現に接するのである。杉本論文は、伝統と創造という古い問題に新しい照明を与えようとしたのである。

山田論文は、人間と動物とを同じ生命の連続体とみる考え方のうちに、私たちの民族的心情、ひいては文学的発想の独自の型を見ようとする。しかし、この発想も、太古以来不変のものではなく、仏教の渡来、西洋近代思想の移入という二大事件によって、かなりの変容をせまられている。そうした変容を通じての恒常的部分の照明が、この論文のねらいであるが、この恒常は、ヨーロッパの人間中心主義とおそらく対照をなす発想の型である。

以上の二論文が「自然」をめぐる考察であるとすれば、次の二論文は、より抽象化された「感情」そのものの分析に向かっている。すなわち「浄」および「羞恥」という感情が問題とされるのである。

梅原論文は「浄」の歴史的展開を明らかにしようとする。神道の清浄観は古代のものであって、仏教によってゆす

ぶられ、つきくずされてしまった、というのが一般の考え方である。浄という価値は、『古事記』においては現実のものであったが、時を下るにつれて、空想的、文学的となる傾向を示すことは否定できない。しかし、中国から伝来した仏教は、日本の清浄観によって、おそらく仏教そのもののうちにひそんでいた浄の価値を拡大する。つまり、浄は、他の思想をつねに取りこみつつ、生きた価値の一つとしてはたらきつづける。漱石、藤村などという近代的作家のうちに、浄の価値が生きつづけていることを筆者は認めるのである。

以上において扱われた感情は、古代に生まれ、近代にひきつがれたものであるが、作田・多田論文は、近代においてはじめて生まれ、しかも明らかに日本的という刻印をもつ「羞恥」の感情をとりあげる。日本は恥の文化をもつとされてきたが、近代日本においては、恥よりもむしろ羞恥が支配的感情である、とこの論文は主張する。一つの所属集団の基準によって裁断する恥の感情は、複合的な集団を群生せしめた近代日本社会では、支配的とはなりえない。むしろ所属集団、準拠集団の異なるさまざまの視線に射すくめられたところから生じる羞恥こそ、この社会にふさわしい感情としてあらわれる。したがって、そこに生まれた芸術・文学には、この羞恥の感情の構造を軸とした分析によって初めてその本質を明らかにするものが多いはずである。そうした観点から、竹久夢二、嘉村磯多、太宰治の三人の芸術家がここに事例研究されるのである。

この第二部におさめた四論文は、民俗、宗教、社会——これらをひっくるめて「社会」というなら、文学への社会的接近を特色とする。「感情の論理」を媒介として、これと美学的接近との連関を明らかにしようとしたが、その成功には濃淡の差があり、なお仮説としての普遍性に乏しいうらみがある。

第三部は、「政治と文学」の問題をとり上げた。この問題は、従来、マルクス主義の立場から、それを肯定するにせよ、否定するにせよ、その規定のもとに、政治活動と文学活動との関係として論議されてきたのであるが、ここでは、より広い、またより内的な見地から、この二つの相関と分離を考察することによって、日本近代文学の一断面に光をあててみようを試みた。

松田論文は、「社会主義小説の濫觴」として、木下尚江の『火の柱』をとり上げたが、この小説作品の文学としての

出来ばえがよくないのは、執筆当時の尚江がそうであったところの「政治的人間という人格構造が、文学を創造するのに適しなかった」からだとし、これを一般化する仮説を提示している。革命家と神秘家は、ともに文学創造に不適合であって、両者のあいだにある人格構造のみが、文学者として創作しようというのである。筆者は、尚江のライフ・ヒストリーの精密な分析によってこれを立証したが、この仮説を補強するためには、明治初期の政治小説や後のプロレタリア文学の代表的作家についても、同様な分析を試みる必要があるであろう。

高橋論文は、主として『それから』を分析の対象として、いわゆる「余裕派」作家の描いた「高等遊民」が、直接的に政治をとり上げた作家ないし作品よりも、かえって社会問題に関する「痛み」といっていいほどの深い関心を内包していることを、この小説執筆の二年前に姦通罪が制定されたという事実をふまえて立証しようとする。筆者は、恋愛という一見非政治的な領域において自己の理想を守るためには、破滅も死も恐れない代助のうちに、その後の知識人像には見られない苦悩に満ちた魅力ある人間を見出している。

序
上山論文は、従来、その政治性の欠如を批判されがちであった「私小説」が、西洋の本格小説の理念とは異なった意味における政治性、個人の生活を内部から掘りくずすという意味の革命性を内蔵するという指摘によって、その政治思想性を再検討しようと試みた。これは一つの新しい問題提起であるが、これを一般理論化するためには、私小説の全貌を見わたし、さらに日本の文学史、思想史の古代・中世以来の見通しの上に問題を設定することが、今後の課題として要請されるであろう。

飛鳥井論文は、従来、戦争協力文学としてのみ扱われがちであった火野葦平の文学のうちに、正統派プロレタリア文学よりもかえっていっそう深い政治と文学との相関に関する思索と表現を見出すことによって、政治と文学の問題に新たな分析視点を示唆している。ただ、筆者の病気のため、階級問題と民族問題との関係が十分に掘り下げられずに終わったことは遺憾である。他日の再論が期待される。

以上四つの論文は、非政治的なるものの政治的効果を明らかにし、政治と文学との問題を公式的政治優先主義から人間の心の中へ一段おろすことよって、新しい視点を導入しえたのでないかと思われる。

第四部は、「準拠集団としての諸民族」と題して、日本文学の国際的側面をとり上げた。国際性ということばは、一つの国文学の諸外国における受けいれられ方に結びつく。『源氏物語』から野間宏、三島由紀夫にいたる諸作品が、どのように海外で享受され、影響しているか、それは興味ある問題だが、今回は触れることができなかった。ここで私たちがとらえようとした国際性とは、日本文学が海外の諸民族の文化をどのように形象化しているかという問題にかざられる。フランス、中国、朝鮮を例として選び、それらが現代日本文学にどのように投影しているかを、いくつかの作品を通して考察しようとした。

言

明治以後の日本は、急速な近代化という国策の要請にこたえて、ヨーロッパをモデルとし、自国の現状をたえずこの理想と比べて自己批判する習慣をつよくもった。このような準拠枠の採用は、文学の領域にも当然影響を及ぼさずにはおかなかった。文学作品にあらわれた準拠枠としての諸民族の像は、しかしながら、かならずしも同時期の政府の用意した教科書の教材と同じではない。たとえば、明治中期以後の政府にとって、ややわづらわしい存在となったフランス文化の理想像は、文学の領域においては、明治・大正・昭和を通じて最も重要な準拠枠として作用した。第二次世界大戦中の鎖国的状況において、なおフランス文化を準拠枠として当時の日本を批判しつづける視野をもったものとして「マチネ・ポエティック」があり、この同人は、ヨーロッパをモデルとする日本文化人の思考様式を極限にまでおし進めた。彼らがよりどころとしたフランス象徴主義は、当時のヨーロッパの現実からの脱却を願望したが、彼らが軍国主義の日本において天皇を受けいれず、フランスの美的理想を選んだのは、構造として相似である。彼らは、みずからの力でつくり上げた西欧的環境と、そこでやしなわれた西欧的心情によって、その態度を可能とした。その間の事情を追跡したのが西川論文である。

近代日本にとって、西洋が理想の準拠枠であったとするならば、朝鮮はその正反対のマイナス準拠枠であった。こ

の事情は、文学にどのような影響をもたらしたか。朝鮮と日本を比較することによって、現在の日本人には直接見えにくい現実の日本の問題を取り出すという方法は、満州事変以後の日本の進歩派の転向体験と、その後日本全国民の受ける戦争体験から生まれた。明治以後百年間の日本文学史のなかで、朝鮮人を主要登場人物とする小説は、最近の十年間のみに集中しているという事実は、統計上の偶然として見ることはできない。鶴見論文は、そこに内在する意味をさぐることによって、近代日本文学研究に新しい視点を提供しようとする。

近代日本文学は、中国をどのようにとらえてきたか。両国文化の交流の量が巨大であることはいうまでもないが、それだけに、理解の質の問題が重大な意味をもってくる。魯迅というひとりの文学者の像をつくり出すにあたって、太宰治と竹内好とがどのような方法をとったかを通して、荒井論文は現代中国への日本文学の接近のしかたを考察した。太宰は、魯迅の作品のなかにある罪と贖罪の力学的対応構造を理解せず、自分のもつ羞恥心の感情の力学にひきよせてその像を構成した。竹内は、魯迅を罪と贖罪の対応のなかにとらえたが、魯迅死後の中国において、この文学者が聖化されていく過程にたいしては黙認する。魯迅が聖化を拒否するものとして描いた民族の肖像(阿Qの像)は、むしろ太宰の描いた魯迅の一部において生きているのではないか。

この三つの論文は、社会学においていわれる準拠集団の概念と役割交換の概念から刺戟を受けているが、筆者たちは、みずからの関心によって選んだ作品の分析によって、これらの概念を自由に使用している。これらの試論だけでは、まだ一般的な結論を導きだすことは危険であろうが、さらに多くの事例にあたることでできれば、それらの積みかさねによって、やがて世界文学としての日本文学の位置、世界文学そのものの現実と可能性を測定することができるようになるであろう。

この共同研究は、対象が文学であるという意味において、論文執筆の分野の枠をあらかじめきめておくことができなかつた。またことさら求めもしなかつた。研究開始後二、三年で、各研究参加者の関心の方向がおのずと定まり、その組み合わせによって、いくつかのグループ、すなわち本書における第一部から第四部までが組織されたが、それ

だけでは全般の統一性が欠けるおそれもあった。そこで、日本近代文学のなかから一つの有名な作品を合議によって選び、それを全研究者が追求することにしたと考えた。各研究者はそれぞれ自己の論文を作成したあと、そこに展開された理論ないし考え方にもとづいて、その選ばれた作品を短い枚数で批評するというのである。その対象として選ばれたのが中里介山の『大菩薩峠』であった。このすぐれた大河小説には、いかなる接近も可能だと考えられたからである。残念なことに、私たちはめいめいの論文作成に時間をとられてしまい、『大菩薩峠』への集中攻撃をおこなう時間的余裕を失ってしまった。そこで、かねてからこの巨大小説の愛読者であり、また研究会においてもこれをとりに上げたことのある橋本峰雄が、可能なかぎり各研究者の論点を参照しつつ、この『大菩薩峠』を分析することによって、一つの統合を試みようとした。それが第五部である。橋本の努力の成果に全研究者が加筆しえなかったのは残念だが、もしメンバーのなかのだれかの考え方がここに十分反映していないとするならば、それは筆者の責任ではなく、全研究集団のそれであることを申し添えておきたい。

付論には、以上の五部に収めきれなかった一般的なし基礎的研究を収めた。

序
竹内と牧には、桑原らの「文学価値論」に組み入れる目的をもって、それぞれ言語および共感の問題について基礎研究を求めたのであるが、膨脹して一論文を形成したので、ここに別置したのである。

藤岡・樋口の報告は、最初の計画では、さらに多くの研究者が参加して、もう少し深化した大きな調査とする予定であったが、これまたさまざまの理由によって、十分の実現をみなかったことは残念である。研究の途中において、研究参加者全員の文学読書経験を調査したこともあるが、これも活用されるには至らなかった。今後に期待すべき研究領域である。

私たちの最初の共同研究であった『ルソー研究』の「はしがき」において、私は研究のスピード・アップを主張し、じじつその研究を一年半で完了したのであったが、一七年後には、このささやかな研究のために七年をついやしてし

まったことに、研究主任として複雑な感慨を禁じえない。その間、じつに多くの知的快楽を味わい、刺戟的な討論によってそれぞれ得るところは大であったにしても、それが大きかっただけに、その数分の一しかここに報告しえていないように感じられるからである。しかし、いまはすべてを学界、文学界の公正な批判にゆだねて、毎回私たちの共同研究の刊行に好意を示される岩波書店にたいして感謝の意を表するのみにとどめて、ペンをおくこととする。

一九六七年夏

付記 本研究は昭和四十一年度文部省科学研究助成金をうけた。

共同研究参加者

京都大学人文科学研究所

京都大学教養部

京都大学文学部

神戸大学文学部

立命館大学文学部

同志社大学文学部

大阪府立女子大学学芸学部

京都女子大学人文学部

橘女子大学

医師

桑原武夫
上山春平
多田道太郎
樋口謹一
藤岡喜愛
加藤秀俊
飛鳥井雅道
竹内成明
作田啓一
山田稔
高橋和巳
橋本峰雄
梅原猛
西川長夫
鶴見俊輔
牧康夫
杉本秀太郎
荒井健
松田道雄

目次

序言……………桑原武夫……………1

第一部 文学における価値

文学価値論……………桑原武夫……………2

小説の比較価値論……………加藤秀俊……………29

第二部 文学的発想の原型

植物的なもの……………杉本秀太郎……………46

鳥獣虫魚の文学……………山田稔……………65

浄という価値……………梅原猛……………78

羞恥と芸術……………作田啓一……………98

第三部 政治と文学

社会主義小説の濫觴……………松田道雄……………122

	知識人の苦悩	高橋和巳	140
	集団価値否定の系譜	上山春平	156
	民族主義と社会主義	飛鳥井雅道	170
第四部	準拠集団としての諸民族		
	朝鮮人の登場する小説	鶴見俊輔	184
	二つの魯迅像	荒井健	201
	日本におけるフランス	西川長夫	219
第五部	『大菩薩峠』論	橋本峰雄	244
付論			
	文学の言語	竹内成明	276
	共感とイマジネーション	牧康夫	290
	文学経験とパーソナリティ	樋口喜一	309
索引			

第一部 文学における価値